

[翻 訳]

日中友好事業に尽力する女性作家謝冰心 ——新発見の二篇の発言記録から

虞 萍

解題

1945年8月6日長崎、8月9日広島における2か所の原爆投下は、その年末までに多くの朝鮮人、中国人や連合国捕虜などを含む約21万人（長崎約7万人、広島約14万人）、また今日まで35万人以上にのぼる原爆犠牲者が出た。今なお放射能後障害で苦しんでいる多くの被爆者がいる¹。

1955年8月5日、北京で1,500人が「原爆使用反対大会」に参加し、6億の中国人民が全世界のすべての核戦争に反対する人々の忠実なる友達である、と表明した。8月6日、『人民日報』は『原水爆禁止のために引き続き奮闘する（為禁止原子弾和氢弾而繼續奮闘）』という社説を發表した。

中国では「文学の祖母」と呼ばれる ひょうしん 冰心（1900-1999、日本では「謝 しゃひょうしん 冰心」と呼ばれている）は一生を通して8回来日し、うち4回目に来日した主な目的は、「第1回原水爆禁止世界大会広島大会」（1955年8月6-8日）に参加するためであった²。当時、りゅうねいつ 劉寧一が中国代表団の団長を担い、アメリカ、オーストラリアなど11ヵ国50人の代表を含め5,000人がこの大会に参加し、原水爆禁止を求める署名が、日本で3,238万名分、世界で6億7,000万名分集まったと報告された³。8月15日、東京大会が開かれた。第1回原水爆禁止世界大会終了後、「日本準備会」と「署名運動全国協議会」が発展的に統合して生まれたのが、「原水爆禁止日本協議会（日本原水協）」である。

ここに訳出した「原爆被災の国にきて」（座談会記録、訳者不詳『婦人公論』第40巻第10号〈総462号〉、1955年10月）、「日本の青年のみなさまへ——子子孫孫の歴史とこれからの道」（謝冰心発言、訳者不詳『アジア経済旬報』第907号、1973年8月1日、p.1-6）は、現時点で最も充実した冰心作品集である卓如編の『冰心全集』（全9巻、海峡文芸出版社、1999年）と冰心佚文集『我自己走過的路』（『私自身が歩んで来た道』（王炳根選編、人民文学出版社、2007年、p.50-107、p.128-201全25篇拙訳）にも収録されていない。そのため、日本語訳を収録し、中国語に翻訳する。前者は、中国代表冰心、ソヴェト代表医学博士N・シュトーヴァ、ポーランド代表国會議員Z・ワシリコフスカヤが母国での原水爆禁止の活動および原爆被害者への支援について記録したものである。この発言記録の中で、冰心は原爆被害者への精神上的の慰問方法を説明しただけでなく、被害者に自身の実際の原水爆被害の経過や、自分のなめた苦痛などを書くことをも勧めた。後者は、冰心が7回目に来日したとき（1973年4月16日-5月18日）の5月12日に、東京で朱良（青年活動家）など6名の団員とともに、「日中両国に友情の橋をかける青年の会」の要請で懇談会に参加し、子子孫孫の日中友好についての考え方を述べたときの記録である。冰心は祖父、父そして自分と子供の実体験を例に挙げて、「子子孫孫、世世代代」の日中友好を実現する難しさと必要性を日本の青年たちに丁寧に説明した。この2篇の発言記録を通して、日中友好事業に尽力する冰心のさらなる真髓を窺うことができるであろう。

原爆被災の国にきて

八月六日から三日間広島で開催された原水爆禁止世界大会には、世界各国から多数の代表者が参加し、平和を守る決意を新たにして幕を閉じたが、本誌はこの大会のために来日された婦人代表の方々にお話しいただいた。

中国代表 作家謝冰心

ソヴェト代表 医学博士N・シュトーヴァ

ポーランド代表 国会議員Z・ワシリコフスカヤ

原爆大会に参加して

シュトーヴァ 私は個人として、またソ連代表団を代表して申し上げます。私たちは、広島最初の会議に出席できなかったことを、非常に残念に思います。しかしその後の日本での会合に出席した印象は、まさしく私の一生忘れられない程のものでした。それは、日本人民の団結、平和への意志の団結、日本人民の活躍ぶりでした。友情は日本人民と外国代表団との双方から示されましたが、とくにこの友情が単的に示されたのは、会場で唱われたいろんな歌でした。そして日本の青年たちが『カチューシャ』やその他のロシアの歌をうたい、私たちは『原爆を許すまじ』のような日本の歌をいっしょに唱いました。私たちはあまり休息をとらなかったのですが、この大会に示された偉大な精神に励まされて、たいして疲れませんでした。私たちは早速この大会の模様を電報で知らせましたから、すでにソヴェトの新聞にも、この日本の大会のことが記事にでました。そして帰ればすぐに私たちは、いろいろとこの大会のことをみなに伝えるつもりです。広島大会は全く世界的な意義をもったものだと思います。なぜなら、世界の平和運動を一だんとたかめたものでしたから……。

謝冰心 私はこの大会に参加しましたことで、日本人民の団結と、希望に満ちた顔が見られ、それは、以前のような沈んだ顔とはちがっていることで、この平和運動は日本人民の希望でもあったのです。

ワシリコフスカヤ 今度私は、あらゆる階層の人とお話をしました。学生、労働者、労働組合員、科学者、その他すべての青年たち、婦人たち……。そして日本の原子爆禁止運動は非常に広汎なものだと感じました。それから私はこの大会に出席するまえに、広島、長崎に落された原子爆弾の被害の状況についての一般的な報告は知っておりましたがけれども、実際の被害

者、特に若い婦人たち、おそらく原爆の洗礼を受けたときは子供であつたろうと思われるような若い人たちの報告を具体的に聴いて、非常に強く胸をうたれました。被害者たちが、自分たちが受けた苦しみをただ人に訴えるというだけではなく、その自分たちの苦しみの経験の故にこそ、再びこういうことが行われてはならないというので、原子爆禁止運動に積極的に参加している、ということでした。

シュトーヴァ 私は医者で、小児科医を養成する研究所の所長をしており、この研究所は非常に大きな組織で、千六百人の小児用ベッドをもっています。私は医者としての経験から、今日まで治療不能とされていた病気、たとえば白血病、原子病というような病気の治療がいかに困難であるかということをよく知っています。長崎、広島の被害者、原子病に悩んでいる患者たちと会った結果、私は断乎として、核兵器、原子兵器という非人道的な兵器の使用に、抗議するものです。ソヴェトでは、白血病患者の治療に当って、現在、放射性アイソトープを使っています。私が今度日本へ来るため、祖国をたつ数日前、私は私たちの病院から退院しようとしている二人の白血病の子供をみました。その子たちの治療は放射性的の憐れでやりましたが、非常に効果顕著で血球の状態は非常に良好でした。しかし私たちはまだ、白血病を完全に治癒できると、確信をもっていいきれません。しかし、今日までのところでは、この放射性物質による治療ほど有効だったものはありませんでした。こうして、片方は放射能のおかげで白血病がよくなるきざしがみえており、一方では、広島、長崎の、多くの若い人たちが原子爆弾のために生命を奪われてしまったことを考え合えると、放射能というものの二つの差異がみられます。一つは病気の治療に非常に役立つ、一つは人の生命を奪ってしまうということ……。私は医学研究所長として、また実験医学委員会の委員長として、世界各国の医師たちに対して、この放射能を、医学的に、平和的に、使用するようよびかけます。そしてその成果が、日本の方々にも有効に利用されますように……。実際の観点からいっても、世界各国が医学の面における成果や知識を互いに交換す

ることは、非常に大切なことだと思われま

平和運動を強化するために

ワシリコフスカヤ この原水爆禁止運動を世界的に拡げる具体的な方法としては、こんどの広島の世界大会の結果をみんなになるべく広く知らせることが第一だと思います。そしてそれは具体的にいえば、私としましては、帰るとすぐポーランドのあらゆる新聞雑誌、あるいは大衆の集会その他の機会を通じて、大会の決議その他の結果を報告します。その中で特に関心があるかと思われることは、ポーランドの『婦人の友』という婦人雑誌——発行部数は約二百万という大きなものですが——にそのことをぜひ載せませ

す。もしこれが、民衆に知らされるなら、原水爆兵器の無残さ、残酷さにたいする全世界の婦人たちの怒りが盛り上って、おそらく今後の世界の原水爆の運命をきめて行く、四大国政府の政策決定に、大きな影響を与えるだろうと思います。

謝冰心 原子爆弾の恐しさは当然ながら、それより私はもっと、現在の団結の力というものも、非常に強いものだと思っております。ですから、その団結力で必ず原子爆弾を禁止することができると思っています。と同時に、私の希望したいことは、非常な苦痛をなめている原爆被害者の方たちは、空しく苦痛にたえているだけではなく、私たちの原子爆反対への気持をいっそう勇気づけるように、役立って下さることが必要だと思うのです。昨日私は演台の上に坐っておりましたのですけれど、ちょうど私たちの向い側に原爆被害者たちがおられて、代表者の一人一人が「人民があなた方とともに訴える」と発言したら、被害者の人たちの顔には非常に明るい表情が浮びました。きっとこの人たちはこの会議に参加して、はじめて全世界の、こんなにたくさんの人たちが同情し、援助していることを知って、非常に力強く思ったのではないかと思ったのですが……。中国でも私自身をも含めて、みんなウィーン・アピールを支持しております。具体的な数字は私はまだはっきりしないのですけれど、六億人民の中で四億以上が

署名したということで、全人口の三分の二を占めております。各地区全部署名運動が行われ、一日を署名デーにきめたと聞いております。この日には全国各都市、農村で会議が行われたわけです。私の工作（仕事）している中国の作家協会では、署名デーのその日は、作家協会の茅盾の司会で署名しましたし、また私の居住地では、居民委員会というのがありまして、そこでも署名することを呼びかけております。何しろ署名運動は非常に広くわたっており、学校、工場、農村、政府機関やいろいろな機関、各単位がみな署名運動に参加しております。

ワシリコフスカヤ また私は、これらの犠牲者を救うための救済団体、救済のための世界的な組織というものをつくることは非常に有意義だと思います。そしてさらに、この人たちの犠牲を決して無駄にはならぬと思います。

謝冰心 被害者の方たちへの精神上的の慰問については、各国の間で文通すること、それから、憩いの家を建てて、原爆被害者を休養させるということも非常にいいことだと思うのです。もう一つ私が考えたことは、被害者たちが、自分の実際の原水爆被害の経過や、自分のなめた苦痛などを書いたらどうかということです。それは一面では自分の苦痛を書き出す意味があり、もう一つの面からいいましても、それで原水爆の被害状況の真相を世界の人たちに知らせるということも、いい方法じゃないかと思うのです。

世界の女性が手をつなぐには

シュトーヴァ これについては、最近の世界母親大会のことをお話しするのが良いと思います。私自身、世界母親大会におけるソヴェトの代表の一員として出席しましたが、七十国からの代表が出席したその大会で、彼女たちは、すべて、世界平和のため、世界の子供たちを守るという一つの目的につながっていたのです。会議は四つの決議を採用しましたが、第一は「全世界の母親への訴え」で、これは、全世界の母親が世界平和のための原子兵器の禁止、軍縮、世界各国の平和的交流のため、ともに働くことを

訴えています。もちろん全世界から戦争を禁止することが必要です。この世界母親大会は、四巨頭会談⁴のわずか十日前まで行われたわけで、したがって四巨頭への決議も採決されました。第三番目は国連にあてたアピールで、この決議は、軍事費を削減して、それを保健、教育、社会、その他の建設的な事業に使うことを、各国政府に訴えたものです。こうした全世界の平和のための婦人の運動の、先頭にたっているのが、世界民主婦人連盟です。世界母親大会では私も日本の代表に会いました。それについて、全く個人的な意見を申上げるなら、日本はただ一つの統一した婦人の組織を作らねばならぬと思います。そして、世界民婦連と連携すべきだと思います。ソ連の平和運動についていえば、五月に第五回全ソ平和愛好者大会が開催され、この大会には私も出席しましたが、大会では満場一致で、すべてのソヴェト人民の、原子核兵器禁止の意志を表明いたしました。大会にはすべての教会も参加したのです。私たちは無神論者ですが、その私たちといっしょに宗教団体も歩いているのです。ソヴェト人民の意見は、ソヴェト政府の意見と同じで、それが私たちの力の根源ですし、わが国では、戦争が自分の利益になるというような人間は、一人もいないということを、私は責任をもって申上げることができます。

ワシリコフスカヤ ポーランドでも婦人たちは非常に重要で、活発な役割を果しております。たとえば原水爆禁止の署名運動が、やっぱり積極的に行われ、人口二千八百万にたいして、約千二百万の署名が集ったわけです。その中の半数以上は婦人の署名で、しかもそれだけではなくて、署名を集める動きの大部分というのは婦人たちがしたのです。無論、全世界の婦人、特に母親あるいは家庭婦人というのはまず、家庭の幸福ということを第一に考えるということは、全世界共通のことで、そのためには当然平和ということが必要不可欠な条件になってくる。それ故にこそ、世界の婦人は、平和のために結集しております。それを象徴する一つのいい例として、今年の春ポーランドで、世界母親大会の準備のためのポーランドの全国母親大会が行われたとき、いままでそういう会合とか、むずかしい会議など

に出て、ものをしゃべったりしたことは一度もないような農村の、婦人たちがたくさん集ってきたのです。会議に出席して、母親として、自分たちの子供の幸福を守るために平和をかちとらねばならぬという、それだけのことを言いたいために、全国から集ってきたのです。

シュトーヴァ 平和運動を世界的に拡大してゆくために、重要なことは文化、科学など、あらゆる面での交流をすることが重要だと思います。それで編集部にとくにお願いしたいのは、私たちの雑誌『ソヴェト婦人』にぜひ論文を送っていただきたいということです。それは各国語に訳されて、全世界に紹介されます。私たちは、世界各国から通信を受けているのですが、日本からは一つもなくて、とても残念です。それから私は、これが一番いいかどうか確信をもてませんが、国際的支援団体を組織して、原爆被害者を助けねばならないと思います。この被害者は、原爆の症状が表面に出てくるのはだいぶおそくなってからです。それで私は、日本の婦人団体が、これら被害者の家庭の子供たちを守る手段を、一日も早くこうじて下さるようお願い致します。そしてすべての子供たちのために医療と予防を発達させることが必要です。私は日本の婦人と知合いになれて、非常に喜ばしく思っています。そして、彼女たちの平和のためのたたかいが、成功をおさめ、全世界の婦人の手を結ばれることを祈ります。

亲临原子弹受害国

来自世界各国的众多代表参加了自8月6日起在广岛召开的为期3天的禁止原子弹和氢弹世界大会。大会在重申了坚守和平的意念后，降下了帷幕。本杂志采访了为参加本次大会前来日本的各位女代表。

中国代表 作家谢冰心

苏联代表 医学博士N·Sytova（N·瑟托伐）

波兰代表 国会议员Z·Wasilkowskaya（Z·瓦西尔科夫斯卡亚）

参加原子弹大会

瑟托伐 请允许我以个人的名义或作为苏联代表团的一名代表向大家做一个汇报。我们非常遗憾没能参加广岛的第一次会议。但其后在日本参加的会议中感受到的日本人民的团结性，向往和平的团结意志以及日本人民积极努力的精神着实让我终生难忘。友情从日本人民和外国代表团双方间体现出来，尤其是会场上唱颂的各种歌曲更是将这种友情展现得淋漓尽致。日本青年们高歌了《喀秋莎》等苏联歌曲，我们则一同歌唱了《禁止原子弹》等日本歌曲。虽然我们几乎没有休息，但由于受到大会洋溢的伟大精神的鼓舞，大家并没觉得太累。我们争分夺秒地将这次大会的详细情况以电报的形式传回祖国。苏联的报纸上已经刊登了有关日本这次大会的报导。回国后我们也会立即向大家传达本次大会的具体事项的。我认为广岛大会是一个对全世界来说都极具意义的会议。因为它将世界和平运动上升到了一个新的台阶……。

谢冰心 通过参加这次大会，我感受到了日本人民的团结精神，他们那一张张充满希望的脸庞和过去那些意志消沉的面孔是不一样的。不仅如此，我感到这次和平运动也可以说是日本人民的一种希望。

瓦西尔科夫斯卡亚 这次我和学生、劳动者、工会人员、科学家以及其他所有的青年、妇女等各阶层人士进行了交谈，并且感触到了日本的禁止原子弹和氢弹世界大会的庞大性。虽然我在参加本次大会前已对广岛和长崎被原子弹轰炸后的受害状况略有所知，但当我倾听了受害者尤其是年轻妇女，那些在经历原子弹爆炸洗礼时尚为孩子的年轻人的报告后思绪万千。受害者们积极参加禁止原子弹和氢弹世界大会的目的不仅仅是在向人们诉说他们自身的痛苦，而是因为正是他们自身经历了这些痛苦的灾难，并且认识到绝不能再次重现这种灾难了，所以他们才积极地参加禁止原子弹和氢弹的运动。

瑟托伐 我是一名医生，现担任培养儿科医生研究所的所长。我们的研究所规模很大，拥有1600个儿童床位。作为一名医生，我对目前医治白血病、原子弹病等不治之症的难度是十分清楚的。见到长崎和广岛的受害者以及因原子弹而留下后遗症的患者后，我越发坚定了反对使用核武器、原子兵器这些非人道主义兵器的决心了。在苏联，对于白血病患者治疗，目前使用的是

放射性同位素。这次因为要来日本，所以在出发的前几天去看望了即将从我们医院出院的两位白血病儿童患者。我们用具有放射性的磷对他们进行了治疗，其效果非常显著，他们的血球状况特别理想。但是即使如此，我们依然没有将白血病完全医治好的信心。但到目前为止，没有比这种放射性物质更好的治疗方法了。就像这样，一方面放射能让我们看到了治疗白血病的希望，但另一方面，类似广岛和长崎那样，众多的年轻人因原子弹爆炸而断送了性命。如此一比较，放射能的两面性便一目了然了。其一是能有效地治疗疾病，其二则会剥夺人的生命……。作为医学研究所所长和实验医学委员会的委员长，我要向世界各国的医生们呼吁，希望大家能将这种放射能用于医学与和平事业。并且我希望这一成果在日本也能得到有效地利用……。从实际的观点来看，世界各国在医学上互相公开成果、切磋知识也是非常重要的。

为强化和平运动

瓦西尔科夫斯卡亚 作为这次原子弹和氢弹禁止运动推广于世界的具体方法，第一步便是要极尽全力地向世界各国人民公布这次大会的结果。具体来说，我将在回波兰以后通过所有的报刊杂志、大众集会以及其他机关报导大会的决议以及其它各种结果。其中特别要做的便是在具有二百万部发行量的波兰妇女杂志《妇人之友》上刊登这一消息。如果这一事实能让民众了解，那全世界妇女就会痛恨原子武器爆炸兵器的无情性和残酷性。这将对今后决定世界原子弹爆炸的命运以及四大国政府的政策产生举足轻重的影响。

谢冰心 原子弹的威猛性是不言而喻的，但在我看来，比这更强劲的是目前人们团结一致的力量。因此，我相信这种团结的力量一定能阻止原子炸弹。与此同时，我希望承受剧痛的原子弹的受害者们不要只是徒然地忍受痛苦，而是要更多地发挥你们的作用、鼓励我们更加反对原子弹。昨天我坐在演讲席上，对面正好坐着原子弹爆炸的受害者们，当一个个代表高喊“人民和你们一起控诉”时，受害者们的表情顿时豁然开朗。这些人一定是参加了这次会议以后才第一次认识到全世界居然有那么多人同情和支援他们，因此心里才感到无比踏实……。在中国也包括我自己，大家都支持着“Vienna Appeal”

运动。虽然我还没掌握具体的数字，但六亿人民中有四亿以上，也就是全人口的三分之二的人都支持着这一运动。各地区纷纷进行了署名运动，还设定了“署名日”。这一天，全国各都市和农村纷纷召开会议。我所属的中国作家协会在“署名日”这一天，由作家协会的茅盾主持展开了署名运动。另外，在我所居住的地区有一个居民委员会，那儿也号召大家参加署名运动。总之，署名运动涉及的范围极其广泛，学校、工厂、农村、政府机关以及各机关、各单位都积极地参加了。

瓦西尔科夫斯卡亚 另外，我认为，为援助这些牺牲者成立救济团体和救济世界组织也是非常有意义的。更重要的事，我们千万不能让这些人白白地牺牲。

谢冰心 有关对受害者们精神上的慰问，采取各国间的通信、为原子弹受害者建立温馨的家园让他们静心休养这些做法都是非常好的。我还有一个想法，就是希望受害者们把自己实际的被炸经过以及自身所承受的痛苦记录下来。我认为，一方面记录自身的痛苦是一件有意义的事情，另一方面这也是让世界人民了解原子弹和氢弹爆炸的真实受害状况的一种很好的方法。

世界上的女性如何手牵着手

瑟托伐 有关这一点可以谈谈最近的世界母亲大会。就我本人而言，我作为苏联代表出席了此次会议。来自七十个国家的代表参加了此次会议，她们都秉着保护世界儿童这一目的而心心相印。会议采纳了四项条例。第一，“向全世界的母亲控诉”。即，希望全世界的母亲为了世界和平而控诉禁止原子弹兵器、减少军用，为世界各国的和平交流而共同奋斗。毋庸置疑，全世界必须禁止战争。由于这次世界母亲大会在四巨头会议⁵的前十天召开，所以对四巨头的决议也做了採决。第三是向联合国的提议。这一决议要求各国政府削减军费，并将这部分节约下来的经费用于保健、教育、社会以及其他建设事业。站在为全世界和平的妇女运动最前线的便是“世界民主妇女联盟”。在世界母亲大会上，我也和日本的代表做了交流。有关这一点，就我个人的观点来说我认为日本必须建立一个统一的妇女组织，并且应该联合世界妇女

联盟。有关苏联的和平运动，五月份召开了第五次全苏和平爱好者大会。我也参加了此次会议，大会一致通过了全体苏维埃人民将禁止原子弹和氢弹核武器的决意。所有的教会也参加了本次会议。虽然我们都是无神论者，但宗教团体还是义无反顾地支持着我们。苏维埃人民的意见和苏维埃政府的意见是一致的，这是我们力量的源泉。我可以非常负责地说，在我们国家没有一个人认为战争是有利于个人的。

瓦西尔科夫斯卡亚 波兰也一样，妇女们非常重要，她们在各方面发挥着积极的作用。例如，禁止原子弹和氢弹的署名运动也同样积极地展开着，在二千八百万人口中有一千二百万人参加了署名。其中半数以上是妇女的署名，不仅如此，收集署名的大部分也都是妇女。当然，全世界的妇女，尤其是母亲或家庭主妇他们最初考虑的是家庭的幸福，这在全世界都是一样的。因此无可厚非，和平将成为一种不可欠缺的条件。就是因为这一原因，世界的妇女才会为和平而聚集一堂。体现这一事实的一个极好的例子便是今年春天，在为准备世界母亲大会而召开的较为严肃的波兰全国母亲大会上，从全国各地汇集而来的许多农村妇女们发了言。

瑟托伐 为了将和平运动推广到全世界，文化、科学等全方位的交流是极其重要的。因此我特别想向编辑部做出的请求是，希望他们能将论文寄往我们的《苏维埃妇女》杂志。寄来的论文将被译成各国文字，回馈给全世界。我们从世界各国收到了来信，但遗憾的是没有收到一封来自日本的稿件。另外，不知这是否是一个最好的方法，我认为我们必须组织国际性的支援团体来帮助那些原子弹爆炸症状显现较晚的受害者。所以我希望日本的妇女团体能尽早制定有关保护受害者家庭的孩子的各项条例。这种加强所有孩子的医疗和预防措施是很有必要的。非常荣幸能结识日本的妇女们，希望她们在为和平的奋斗中取得成功，也希望她们能和全世界的妇女们团结一致！

日本の青年のみなさまへ ——子子孫孫の歴史とこれからの道

まえがきにかえて

ここに紹介するのは、日本でも広く知られ、さきに中日友好協会訪日代表団（4月16日-5月18日）の一員として来日された著名の女流作家謝冰心先生（1902⁶⁻）の発言記録である。

ちょうど10年前、謝冰心先生が日本を訪れたとき、日中両国の国交は回復されておらず、先生はある青年を主とした講演会、「中国と日本との距離はとても近いのです。もし、東京から北京へ、あるいは上海に向けて直行便が飛んでいたら、わずか2時間足らずで行き来ができます。中日両国間に直接の国交関係が結ばれていたなら、なんと爽快なことでしょう。」と話されていた。

今回の日本訪問の際、航空協定はまだ結ばれてはなかったが、中日友好協会代表団一行は上海から東京に直行し、日本各階層の人びとの熱烈な歓迎を受け、友好の輪を大きく広げたのであった。それは、日中両国人民の長期にわたる念願であった国交正常化が、両国人民の努力により実現したからである。

同じ10年前の講演で、謝冰心先生は戦争責任の問題にふれ、「私たちは苦難に陥ったが、日本の一般の人民も、みなさんも、みな苦しみをなめつくしたのです。この責任はみなさんにあるのではなく、なかんずくご在席の青年にあるではありません。」「まえ向きに努力しましょう」と、青年を励ましていた。

そして、今回東京に滞在していた5月12日、謝冰心先生と朱良（青年活動家）先生など6名の団員は「日中両国に友情の橋をかける青年の会」の要請で懇談会をもち、日中友好など広い範囲にわたり、長時間語りあった。このとき、謝冰心先生は10年前のことを思い出し、感無量であったに違いない。

この「友情の橋をかける青年の会」の若者のほとんどは訪中の経験者であるが、いずれの政治組織もセクトにも属していないごく普通の青年たちである。この懇談会でまず彼らは、自分たちが世々代々の日中友好のため尽力する決意を表明し、現在の政治を改めるには自分の力に頼るほかになく、そのためには、自分自身の鍛練から始めるべきだと述べ、訪中の際活気に溢れた中国人民と若者に感激したことを話した。また、日中問題を考へるとき、朝鮮問題をさけて通ることはできないなど、自分達の考えを率直に述べた。

それから日本の青年はまず最年長の参加者である謝冰心先生に発言を求めた。「私はまだ17才(71才)ですからみなさんの仲間です。」と快く承諾して下さり、次のように発言した。(73. 7. 7横川記)

祖父、父、そして私、子供たち

みなさんは口癖のように「世々代々の友好」を口にします。私たちも同じです。大変すばらしい言葉ですよ。しかし「世々代々」の中身について、みなさんは私ほど深く考えていないのではないかと思います。無理ないことです。みなさんにはたぶんまだお子さんはいないでしょうし、ましてお孫さんはいらっしゃらないでしょうから。世々代々の友好とはたいへんなことなのです。私の「世々代々」の歴史を紹介してみましようか。

私の祖父は学校にとつめていたもので、郷里は福建省です。そこは日本にたいへん近いところです。そのせいもあってか、日本にはとても好意をもってました。私が幼いとき、鑑真が奈良にわたった話、朱舜水が水戸に招聘され、儒学を伝授したこと等々、みな祖父に教わったのです。

父は海軍にいました。そしてみなさんのご存知の甲午海戦(1894年のいわゆる日清戦争)に参加しています。父の話ですし、黄海海戦で父の戦艦は日本海軍に沈められ、本人は海を泳いで大東溝近くの島にたどりついたそうです。それ以来、父は日本人を目の敵にし、復讐すると決心したのです。のちに父が海軍学校の校長に就任したのは、まさにかたきうちの「後

継者」を養成するためでした。

私もこうした影響を受けていたためでしょうか、北京で学校にいたところ、いろいろな国のお友達がおりましたけれども、日本のお友達だけはいませんでした。すきになれなかったからでしょう。

のちに私はアメリカに留学することになったのです。私の住んでいる寮には日本のクラスメートもおりました。日本の同学につきあっていると、どういう訳か、ほかの国のお友達よりずっと親しみを感じるのです。もちろん話は通じませんが、同じ文化をもっているというのでしょうか、字を書いて筆談すれば相手の言うことがわかるのです。何時しか私たちは休みになると、一緒にご飯を炊いてお箸で食事をしたりする仲になりました。私は日本のお友達とともに生活することによって、はじめて日本人のすべてが、中国を侵略しようとする悪人ばかりでないことに気付いたのでした。

しかし、ひとにぎりの軍国主義者と広汎な日本人民とを明確に区別するように、私の思想に根本的な変化をもたらせたのは、1946年のことでした。日本が戦争に負けた2年目、すなわち1946年の11月、私は日本にきました。たぶんここにいるみなさんは、その頃まだ小さかったので、当時のことは私の方がよく知っていると思います。飛行機は羽田の飛行場に着いたのですが、飛行機を降りても、日本人は見当りませんでした。一人もいないのです。目に映ったのはなんと全部がアメリカ兵ですよ。横浜から東京に向う自動車の窓から両側を眺めていますと、完全な家屋は一軒もありませんでした。あるのはただ建物の焼あとだけです。木造の建物は全部焼けてしまい、かろうじて倉庫がわずか残っている程度でした。その鉄筋コンクリートの倉庫は、扉が死人の精気を失なった両眼のようにトロンとしてあいているのです。

アメリカ軍は日本を爆撃するさい、大きな建物をねらったのではなく、無差別に「じゅうたん爆撃」を行なったのです。爆撃のあとは、そこらへんが破壊され、焼きつくされてしまったのです。それを知った私はなん

ともいえない思いでした。

私は戦時中いやほど日本の軍隊をこの目でみました。中国の小説には「日本鬼子」という言葉がしばしば出てきますのは、日本人がアメリカ兵を「ヤンキー」と呼んでいたのと同じ意味です。しかし、日本に来て、私ははじめて、日本の民衆が嘗めつくしてきた災難は、私たち中国人民の受けた犠牲よりけっして軽いものではないことを知らされたのです。

私はアメリカで知りあった日本の友達と再会しましたが、その方の家も爆撃を受け、本は全部火の海のなかに消えさってしまったあとでした。みなさんをご存知かどうか知りませんが、洋書が焼けると、字の部分は真黒になりますが、和本は白くなるのです。その友人は燃えかすを両手ですくいあげ、悲しさのあまりに涙を流してしまいました。私も身につまされる思いでした。

思えば、私の祖父は日本にたいしては友好的でしたが、父親は日本人のかたきをとることで一杯でした。私の代になると再び日本人民との友好を願うようになりました。さらにはひとにぎりの軍国主義者と広汎な人民とを区別して戦争を考えるべきことを知らされました。現在私の息子や娘には沢山の外国のお友達がいます。孫は日本の子供さんと同じクラスで勉強しております。

ともかく、中国と日本とは2千年余りの友好の歴史が存在しておったわけです。それが今後も何万年とつづいていくのです。「子子孫孫、世世代代」と。ですから80数年の不愉快な時代はごくわずかな期間でしかありません。忘れ去るべきです。まして、このすべての責任はほかでもなく、軍国主義者が負うべきものでして、日本の人民はいかなるときでも友好を願っていたのです。

勤勉、勇敢な日本民族

さきほど学生の方が、「日本はわれわれにとってなんであるか」ということを話されました。私たちの指導者である毛主席は、「日本民族は偉大な民

族である」。「独立、民主平和・中立をもとめる日本人民の願いがかならず実現するにちがいない、とかたく信じている」と、言っています。この教えは銘記しておくべきだと思います。

もうひとりの方は、日本の友人にはつらつきが欠けていると言っていました。この考えはどうなのでしょうね。もちろん、日本の若者の一部にはアメリカの生活様式の悪影響を受けている人がおります。しかし、いまここにいるみなさんはせいきはつらつとし、迫力のある方ばかりではないでしょうか。日本人民の偉大さについては、私が当時日本にいた1946年から1951年のころと現在とを比べてみればよくわかります。

もしかしたら昔のことはみなさんは知らないのでしょうか。あのころこの大東京の銀座のデパートに行っても品物は何ひとつありませんでした。道端に風呂敷をひろげて店を出すといった具合です。街中アメリカ兵がウヨウヨしていただけで、店には品物がなにも一つおいてありません。1946年の大晦日に、私は年末のにぎわった銀座を見ようと出かけてみました。しかし、そこにはネオンなど輝いていません。銀座の警察は提灯を手にもってゲタをはいていたのですよ。なんとも言えないみじめさです。もちろん除夜の鐘も鳴りませんでした。鐘はみな戦時中に兵器づくりのため徴収されてしまったからです。

しかし、いまの日本はどうでしょう。ニクソンさえいってますでしょう。経済面で日本はアメリカの最大の敵だ、と。日本のこのような復興はいったい誰の手によってなされたのですか。ほかでもなく、勤勉、勇敢な日本人民の力だと私は思います。とりわけ青年の力です。日本人民がいなければ日本の復興は考えられません。私の意見は正しいでしょうか、みなさんに賛成していただけますかしら。

当然、ここにも誰のために奉仕するかという問題があるのです。「アメリカにはたしかに科学があり、技術があるが、惜しいことには、人民の手ににぎられておらず、資本家の手ににぎられているので、それは、内に対する詐取と圧迫、外に対する侵略と殺人のために使われている」と毛主席は

教えています。いまの日本も科学と技術をもっています。工業も経済も発達しています。これが誰の手に納まるかは、みなさん若者たちによってきめられるのです。

朝鮮は日本と同じようにわが国と友好的な善隣関係にあります。とくに「抗米援朝」戦争のなかで両国人民は戦闘的な友情が結ばれました。私たちの国で、みなさんと同じ年ごろの若者には「抗美援朝」という名前の子が沢山います。彼らの親たちは朝鮮戦争の砲火をくぐってきた人です。

私たちと隣国との関係は平和五原則に基づくもので、朝鮮問題に関しては、南北朝鮮の統一に有利なことはすべて支持します。ですから、朝鮮の問題は私たちにとって関心ある問題ではありますが、みなさんのような大きな問題ではありません。

昔の中国、今の中国

「中国の人は力に満ちている」。そうです、しかし、みなさんは昔の中国をご存知じゃないのでしょうか。中国人が「東洋の病夫」と呼ばれていたあの時代の中国を。上海の一例をあげて説明するとわかるかと思います。上海はかつて世界各国帝国主義の植民地でした。街はきたなく、病気は蔓延し、売春婦が群がり、アヘン中毒者がさまよい、世界のすべての悪事が集中していたと言っても決して言いすぎではありませんでした。

その頃の中国人は死人同様で、いまみたいに「生き生きしている」などはとてもいえません。ですから、問題は大眾を信頼できるかどうかにあります。私の体験ですと、昔の中国社会の中で、往々見通しがたたず、悲観的になるのです。しかし毛主席は違います。毛主席は人民大眾を尊重していました。「愚公、山を移す」で、中国人民の頭上にある二つの大きな山をほりくずすため、中国共産党がたまえなく働きつづけさえすれば、「われわれも上帝を感動させるであろう。この上帝とはほかならぬ全国民の人民大眾である。全国の人民大眾が、いっせいに立ちあがって、われわれと

いっしょにこの二つの山をほるなら、どうしてほりくずせないことがあるうか」と書かれています。人民大衆は神様なのです。この結論は中国革命の経験から得たものです「人民、ただ人民のみが世界の歴史を創造する原動力である。」大衆を信じることができれば自然に勇気がわき、迫力が出、せいきはつらつになってきます。私はどンドン年をとっていきますが、気持ちはますます若返る一方です。

自己鍛練と学習、みんなすばらしいことです。重要なことはいかに鍛え、何を学ぶかですね。私は一老人として、ここに「？」を打ってほしいと思います。鍛練と学習にも異った道、違う方法がありますので、曲り道をしていないようお願いしたいのです。

みなさんは若い青年です。若者は自らの力で歩むべき道を切りひらくべきです。年寄の道案内というのは役立たない場合がよくありますからね。

さきほど、一青年が「無限の風光 陰峯に在り」という毛主席の詩を引用されましたね。日本が「無限の風光」に到るのはそうたやすいことではないと思います。私たち中国人民に数十年の歳月を必要としました。今日の新中国を築きあげるため、多くの犠牲を払いました。今後も大きな犠牲を払わなければならないかもしれません。毛主席のほかの詩にこういうのがあります。紹介しましょう。

為に犠牲となれる壮志は多かりしが
敢て 日月をして新しき天に換えしめぬ

みなさんは中国に行ったことのある方ですから天安門広場にも立ち寄ったことでしょう。おわかりのことだと思いますが、左手には中国革命博物館と歴史博物館が並び、右側は人民大会堂です。その真中にそびえたっているのが人民英雄記念碑です。人民大会堂が建造されるにいたる中国の歴史は、何千何万の人びとの犠牲を代価としてきました。みなさんの会は「日中両国に友情の橋をかける青年の会」といいますね。みなさんが両国

の間にかける友好の橋になろうとするなら、数えきれない多くの人が、その橋をわたり、みなさんの体のうえを、人びとが踏んで歩くことを覚悟していなければなりません。

みなさんの前には明るい前途がさん然と輝いています。もちろん、「無限の風光」に辿りつくには、今後さらに努力が必要です。しかし、これらの過程で、中国の7億5千万の人民は、必ずみなさんの頼りあるうしろだてになることは、絶対間違いありません。確信もって誓います。

今日は若者の会。老人の発言はここらへんで終りにして、青年に譲ります。年をとると、どうも話がくどくなって、申し訳ありません。

寄语日本的青年们 ——世世代代的历史与今后的道路

是为序

在此介绍的是在日本广为皆知，曾经作为中日友好协会访日代表团（4月16日-5月18日）的一员前来日本的著名女作家谢冰心先生（1902⁷⁻）的发言记录。

谢冰心的前一次访日正好是10年前。当时中日两国的外交还没有恢复正常化，先生在青年云集的演讲会上指出：“中国和日本一衣带水。如果开通东京到北京或上海的直航的话，不到2个小时就能到达对方的国家。中日两国间若有直接的外交关系那该多么痛快啊！”

虽然这次中日友好协会代表团一行访日时，航空协定尚未签订，但他们从上海直飞东京时，受到了日本各界人士的热烈欢迎，扩大了友谊的范围。这是因为中日两国人民期盼已久的国交正常化在两国人民的努力下得以实现了。

同样在10年前的演讲中，谢冰心先生也这样谈到了战争的责任问题：“我们陷入了苦难之中，日本的普通老百姓、你们也都尝尽了战争的苦难。这一责任不在于大家，更不在于在座的各位年轻人。”并鼓励青年要“面向未来再

接再厉！”

并且，这次来访东京期间的5月12日这一天，谢冰心先生和朱良（青年活动家）先生等6名团员应“中日两国友情之桥青年会”的邀请参加了恳谈会，并就中日友好等各方面的问题进行了长时间的交流。想必当时谢冰心先生回想起了10年前的情景，并一定激动不已。

所属于“友情之桥青年会”的年轻人大多走访过中国，他们不属于任何政治组织或团体，只是一些非常普通的青年。在这个恳谈会上，他们首先表明了将为世世代代的中日友好事业做出贡献的决心，并提出要想改变目前的政治状况，唯能靠自身的努力，因此必须从磨炼自己出发，并且在访中时被热血沸腾的中国人民和年轻人感动了。另外，青年们还直言不讳地倾诉道，在思考中日关系时，朝鲜问题是一个无法回避的问题。

接着日本青年首先邀请与会人员中最为年长的谢冰心先生进行发言。“我才17岁（71岁），是大家的朋友。”先生爽快地答应了青年们的要求，并做了以下的发言。（1973年7月7日横川记录）

祖父、父亲、我和儿孙们

你们都口头禅似地说“世世代代的友好”。我们也一样。这真是一句了不起的话。但我想有关“世世代代”的具体内容可能大家没有我考虑得那么深刻。这也是情有可原的。因为大家可能还没有孩子，更没有孙子吧？！世世代代的友好是很不容易的。介绍一下我的“世世代代”的历史吧！

我的祖父是开私塾的，老家在福建省。那儿离日本非常近。也因如此，祖父对日本很有好感。我小时候，类似于鉴真赴奈良、朱舜水被水户招聘后向日本传授了儒学等知识都是从祖父那儿学来的。

父亲是一位海军，参加了众所周知的甲午海战（即1894年的日清战争）。父亲说，黄海海战时他的战舰被日本海军击沉，他自己是游泳游到大东沟附近的岛屿后才获救的。从此以后，父亲对日本人痛恨无比，并且决心要对日本人进行报复。此后，父亲就任于海军学校的校长，就是为了培养报复日本的“接班人”。

我也可能因为受了这一影响，在北京上学时有各国的朋友，却没有一个日本朋友。真的是无法喜欢他们吧。

不久后我就去美国留学了。我住的宿舍里有一个日本同学。和日本同学接触后，也不知为什么，感觉比其他国家的朋友更为亲切。当然互相都不懂对方的语言，可能是因为拥有同样的文化吧，靠笔谈居然也能领会对方的意思。不知从什么时候起，我们成为了朋友，休息时一起做饭，然后一起用筷子享用。自从我和日本友人共同生活以后，我第一次发现，不是所有的日本人都是那种想侵略中国的坏人。

但是，我的思想发生根本性的变化，明确区别极少数的军国主义者和广泛的日本人民还是从1946年开始的。

在日本战败后的第2年，也就是1946年的11月我来到了日本。也许在座的各位那时还很小，所以和各位相比，当时的情况我知道得比较多。飞机在羽田机场降落，但是下了飞机，也没能看到一个日本人的踪影。一个也没有。映入眼帘的全是美国兵。在横滨到东京的路旁，看不到一间完整的房屋，唯有被烧毁的建筑物。木造的建筑物几乎完全被烧尽，唯一剩下的只是很少一部分仓库。那扇用钢筋建成的仓库的门像失去精气的死尸的眼睛一样半开半闭着。

美军在轰炸日本时，不是选择大的建筑物袭击，而是无差别地进行“地毯式轰炸”。被炸后的地方面目全非，整个一片都沉浸在火海之中。我了解了这些之后，心里很不是滋味。

我在战争时期亲眼目睹过无数支日本军队。中国小说中经常出现的“日本鬼子”和日本人称美国兵为“美国佬”是一回事。但是，来到日本以后，我第一次发现日本民众遭受的苦难并不比我们中国人民承受的少。

我和在美国相识的日本友人重逢了，她家也被炸了，书在火海中全部化为了灰烬。不知大家是否知道，西洋书籍被烧后字的部分会发黑，而日本线装书被烧后却是白的。这位友人双手捧起被烧毁的书籍，悲痛得泪流满面。我也心如刀割。

回过头来想想，我祖父和日本是友好的，而父亲则一心将日本人视为仇

人。到了我这一代又再度希望和日本人民进行友好往来。并且了解到在思考战争时应该区别极少数的军国主义者和广大人民。现在我的儿子和女儿有很多外国朋友。孙子则和日本孩子在同一个班级学习。

总之，中国和日本有两千多年友好的历史。今后也将延续下去，“子子孙孙，世世代代”。所以，80多年不愉快的历史只是极其短暂的一刻。我们应该忘却这段历史。更重要的是，所有的责任不在别人，而都在军国主义者身上，因为日本人民无论何时都是期盼友好往来的。

勤奋、勇敢的日本民族

刚才学生们谈到“对我们来说，日本是什么？”这一问题。我们的伟大领袖毛主席说：“日本民族是一个伟大的民族。”“我们坚信寻求独立、民主和平以及期望中立的日本人民的愿望终将实现。”我们应该将毛主席的这一教导铭记在心。

还有一位同学说，日本友人缺乏生机，我对这一观点抱有疑问。当然，日本的部分年轻人受到美国生活方式的不良影响。但现场的所有人不都精力旺盛、极具感染力吗？拿我在日本1946-1951年的当时的状况和现在做一个比较就能清晰地发现日本人民的伟大之处。

也许大家对过去不了解。那时即使去东京银座的百货商店，也没有一样商品。人们只是在路边摊开包袱做着买卖。只要街上挤满美国兵，地摊上就什么商品也没有。1946年的大年夜，因为想看看热闹的银座，我出了门，然而，那里没有一盏闪烁的霓虹灯。银座的警察手持提灯，脚踏木屐。甬提有多凄凉了。当然也没有除夕的钟声，因为钟都被作为制造战争兵器的材料征收了。

但现在的日本又是怎样的呢？就连尼克松也指出，在经济上日本是美国最大的敌人。日本的这种复兴是谁争取而来的？我认为不是别人，正是勤奋、勇敢的日本人！尤其是年轻人的力量。没有日本人民就谈不上日本的复兴。我的意见是否正确？大家是否赞成我的这一观点？

当然，这里存在一个为谁奉献的问题。毛主席教导我们：“虽然美国确实

拥有科学和技术，但遗憾的是，它们不在人民的手中，而被掌握在资本家手里。这些科学和技术对内被用于榨取和压迫，对外则用于侵略和残杀。现在日本也拥有科学和技术，工业和经济也得到了发展。这些科学技术落入谁之手，都将由你们青年人决定。

朝鲜和日本一样，和我国处于一种友好的善邻关系。尤其是在“抗美援朝”战争时期，两国人民结下了战斗的友情。在我们国家，在和大家同龄的年轻人中，很多都被取名为“抗美”或“援朝”。他们的父母亲都经历了朝鲜战争的枪林弹雨。

我们和邻国的关系是建立于和平五原则的。在朝鲜问题上，我们支持一切有利于南北朝鲜统一的政策。因此，朝鲜问题是我们关心的一个问题，但不是大家所讲的那种举足轻重的问题。

过去的中国，现在的中国

是的，“中国人民充满力量。”但大家是否知道以前的中国？中国人被称为“东亚病夫”的那个时代？举上海的例子给大家做一下说明，你们就能明白了。上海以前是世界帝国主义国家的殖民地。街道脏乱，百病丛生，卖淫的女人成群结队，鸦片中毒狂流浪街头，那时将上海理解成一个集世界所有恶行之地也绝不过分。

那时中国人如同行尸走肉，和现在这一片“生机盎然”的景象截然不同。所以，问题就在于是否可以信赖民众。在我经历的旧中国的社会里，人们看不到未来，那势必会悲观。但毛主席却与众不同。毛主席尊重人民大众，主张“愚公移山”，认为要推翻中国人民头上的两座大山，就必须依靠中国共产党，并指出，如果中国共产党不断地努力，“我们就会感动上帝。这个上帝不是别人，就是全中国的人民大众。全国人民一齐起来和我们一道挖这两座大山，有什么挖不平呢？”人民大众是神。这一结论是通过中国革命的经验而得来的，“人民，只有人民才是创造历史的动力。”做到相信人民群众，就会自然而然地产生勇气和魄力，从而变得朝气蓬勃。虽然我的年纪越来越大了，但是我的心却越来越年轻了。

自我锻炼和学习都是很了不起的事情。重要的是怎么锻炼、学习什么。我作为一个过来之人，希望你们在这儿能打一个“问号”。锻炼和学习也会有不同的道路、不同的方法，希望大家不要走弯路。

你们都是年轻人。年轻人就应该以自己的力量去开拓未来的道路。老人指引的道路往往会无济于事。

刚才，一位青年引用了“无限风光在险峰”这首毛主席的诗词。日本要迎接“无限风光”并不是一件容易的事情。我们中国人民花费了几十年的岁月。为建设新中国，我们作了很多的牺牲。今后可能还会付出很大的代价。给大家介绍一下，毛主席的另一首诗词里这样写道：

为有牺牲多壮志，
敢叫日月换新天。

你们去过中国，应该都去过天安门广场吧？大家都知道，天安门广场的左侧耸立着中国革命博物馆和历史博物馆，右侧则是人民大会堂。它们中间竖立的是人民英雄纪念碑。在人民大会堂建成前的中国历史上，数以万计的人民付出了牺牲的代价。你们的会叫“中日两国的友情之桥青年会”吧。如果你们想当连接两国间的友好桥梁的话，就要做好让无数个人踏着你们的身躯踩过这座桥的心里准备。

你们的前途是光明灿烂的。当然，到达“无限的风光”还需要各位今后不断的努力。但是，在这一过程中，我相信中国七亿五千万的人民一定会作为你们坚强的后盾的，这一点是不可置疑的。

今天是年轻人的会。老人的发言就到此为止，将话语权还给年轻人。年纪大了，说话太罗嗦了，还望大家多多包涵。

¹ 長崎と広島の原爆災害および原爆被害者が原爆による破壊の直接体験に関しては、『原子爆弾投下さる』（昭和戦争文学全集編集委員会編、集英社、1965年）、

『広島・長崎の原爆災害』（広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編、岩波書店、1979年）、『原爆を読む：広島・長崎を語りつくす全ブックリスト』（水田九八二郎著、講談社、1982年）、『原爆による惨害と被爆者：広島・長崎』（空白の昭和史刊行委員会企画・編集、エムティ出版、1999年）、『戦争を記憶する：広島・ホロコーストと現在』（藤原帰一、講談社、2001年）、『広島：記憶のポリティクス』（米山リサ著、小沢弘明、小澤祥子、小田島勝洪訳、岩波書店、2005年）、『韓国原爆被害者苦痛の歴史：広島・長崎の記憶と証言』（鄭根植編、晋珠採録、市場淳子訳、明石書店、2008年）、山田康博「『ナンバーズ・ゲーム』10年後の再論—原爆投下をめぐる—」（『アジア太平洋論叢』第18号、2009年7月、p.123-145）に詳しい。

² 冰心の計8回の来日状況については、拙著『冰心研究—女性・死・結婚』（汲古書院、2010年、第2章<p.50-92>）に詳しい。今回新発見した座談会記録「原爆被災の国にきて」（訳者不詳『婦人公論』第40巻第10号<総462号>、1955年10月）を通して、冰心が1955年8月6-8日に広島で開催された原水爆禁止世界大会に参加したという事実を判明した。その事実によって、拙著の第51頁で説明した冰心4回目の来日の日付（1955年8月9-27日）に誤りがある。なお、『中国二十世纪通鑒：1941-1960』（第3冊）（中国二十世纪通鑒編輯委員会編著、線装書局、2002年、p.3565）によると、冰心は1955年8月6日に広島に到着した。

³ 「平和へ切なる祈り」『毎日新聞』1955年8月6日。

⁴ 1955年にはスイスのジュネーブで、アメリカのアイゼンハワー大統領、ソ連のブルガーニン首相、イギリスのイーデン首相、フランスのフォール首相が集まったジュネーブ四巨頭会議が開かれました。これは、冷戦が始まってからはじめての、米ソ首脳による平和について話し合われた会議であった。〔虞萍注〕

⁵ “四巨头会议”即1955年美国的艾森豪威尔总统、苏联的布尔加宁首相、英国的艾登首相和法国的埃德加首相在瑞士的杰尼瓦召开的会议。这是冷战发生以来，美苏首脑召开的第一次和平会议。〔虞萍注〕

⁶ 謝冰心の生まれた年は1902年ではなく、1900年である。1999年に逝去した。〔虞萍注〕

⁷ 謝冰心の出生年不是1902年，而是1900年，逝世于1999年。〔虞萍注〕